

19	安城	篠目中学校	ほそい きこ 名前 細井 輝子
分科会番号	2	分科会名	外国語教育

研究題目

仲間とともに、聞き手を意識した効果的な伝え方を追究し、
自信をもって表現できる生徒の育成

～第2学年「Presenting rules in Japan and the world to Michale! Unit4 What is important in a homestay?」の実践を通して～

1 主題設定の理由

2年生は授業に前向きに取り組み、教師や友達の発言にも積極的に反応する姿が見られる。しかし、発表になると緊張から声が小さくなったり、原稿を見続けたり、聞き手を見て話せなかったりする生徒が多い。7月のALTとのパフォーマンステストでも、暗記した英文を十分に話せず原稿に頼る姿が見られ、ALTからも「相手を見て話す意識が必要」と助言を受けた。このことから、発表の基本的な技能を育成する必要があると考えた。

そのため、生徒が英語で伝える力を身に付けるには、新しい文法を学ぶだけでなく、「どうすれば相手に伝わるか」を意識しながら、発表・振り返り・改善を繰り返す学習が重要である。

本単元「日本と世界のルール」は、生徒にとって身近な題材であり、日本と海外の文化の違いを考えながら、must・have to・動名詞などの文法を実際の場面で活用できる。また、ALTに日本のルールを紹介するという目的を設定することで、伝える相手を意識した表現の工夫が期待できる。さらに、ペア、グループ、クラス、ALTへと段階的に発表の場を広げ、毎回振り返りを行うことで、アイコンタクトや声量、ジェスチャーなどの発表技能も向上すると考えた。以上のことから、本研究のテーマを「仲間とともに、聞き手を意識した効果的な伝え方を追究し、自信をもって表現できる生徒の育成」と設定した。

2 研究の構想

(1) 目指す生徒像

研究主題をもとに、目指す生徒像を次のように設定した。

- ① 必要な文法や語句を使って、日本と世界のルールをいきいきと英語で説明できる生徒
- ② 聞き手を意識して、伝わるように表現を工夫できる生徒

(2) 研究の仮説

【仮説①】

発表相手を意図的に変えて、何度も発表練習を繰り返すことで、生徒は少しずつ発表に慣れ、その成功体験の積み重ねが、自信につながるだろう。

【仮説②】

発表した後に友達からフィードバックをもらうことで、生徒は自分の発表のよさや課題に気づき、改善しようとする意識を高めていくだろう。

【仮説③】

振り返りを継続して行い、自分の発表を客観的にとらえる機会を設けることで次の発表で改善しようとする姿が見られるだろう。

（３）研究の仮説に対する手立てと単元計画

目指す生徒像にむけて、以下の手立てを講じていく。

〈手立て１ 仮説①に対して〉

ペア→グループ→クラス→ALT へと発表相手を段階的に広げ、生徒が無理なく発表に慣れていくことができる環境をつくる。それぞれの段階で成功体験を積み重ね、自信と達成感を育てる。

〈手立て２ 仮説②に対して〉

発表後には、ペア・グループ・クラスなど活動の規模に応じて、口頭やワークシート、Forms などを用いたフィードバックの時間を設ける。また、ペアを固定することで前回との変化に気づきやすくし、互いの成長を認め合いながら、自信の形成や改善意欲の向上につなげる。

〈手立て３ 仮説③に対して〉

毎回、発表の様子を動画で記録し、後の授業で自分の姿を客観的に確認できるようにする。動画視聴後、自己評価シートに「できたこと」「改善したいこと」を具体的に記述し、前回との違いを生徒自身が比較できるようにする。

継続的な振り返りによって、改善の方向が明確になり、次の発表への意識付けにつながるよう工夫する。

単元計画

出 会 う 向 き 合 う	まずは知ろう！マイケル先生が知りたいこと① ○マイケル先生のメッセージ動画を視聴する。 ・I want to travel around the world. だって。マイケル先生は、世界を旅したいのかな。 ・I don't know the rules and laws in many countries. だって。たくさんさんの国のルールや法律を知らないって言うてる。 ・マイケル先生が旅できるようにルールを教えてあげたいな。 ・どんな国のルールがあるかな。	・今年の冬休みに ALT が世界を旅したいと考えていること、そして日本についてまだ十分にわからないことを動画を通して共有する。 ・マイケル先生が抱えている困っていることを共有し、これからやるべきことを理解できるようにする。 ・英文を理解できない子がいないようにするために、困っていることを全体で共有する時間を作る。
	日本の法律やルールを調べよう② ○私たちが暮らしている日本のルールとは何だろう。 ○もし外国の友達に「日本では何に気をつければいいのか？」って聞かれたら、なんて答えるかな。 世界のルールを調べよう③ ○世界の法律やルールって何があるかな？ ○日本のルールと比較してみよう。似てる？違う？ ○プレゼンテーションを今の情報でできそうかな。 ・日本と世界のルールは違うことが多かった。 ・マイケル先生に伝わるようにしたい。	・世界のルールを調べる前に、まず自分たちが暮らしている日本のルールについて詳しく調べる時間を設定することで、生徒が身近な生活と結びつけながら理解を深めることができるようにする。 ・第２時で調べた日本のルールと比較しながら世界のルールを調べるようにすることで日本と世界を比較しやすくなり、違いや共通点をより明確に捉えることができるようにする。 ・「その国のルールは日本と似ているか」と問いかけ、生徒が単なる事実収集で終わらず、比較の視点をもてるよう支援する。

深める	日本と世界のルールを英語にしてみよう④ ・ <must><have to> を学ぶ。 ○ルールを英語にしてみよう。 ・ マイケル先生、なんて言ってたかな。 ・ You must not drink alcohol under twenty in Japan. ・ You must not chew gum in public in Singapore. ○must と have to の使い分けは、どうかな？ ・ 同じ「しなければならない」だけど、少し違うんだ。 ・ must not は、禁止だ。 ・ have to ルールや状況でいえるんだ。 日本と世界のルールを英語にしてみよう⑤ ・ <動名詞>を学ぶ。 ○must や have to 以外で使える表現はあるかな？ ○泳ぐことは禁止ってなんていうかな。 ・ swimming is not allowed here. ・ この表現、使えそうだ。 ○自分たちの原稿に使えそうなものは何かな？ ・ いろんな表現を使いたい。 ・ マイケル先生が分かりやすい表現で伝えられるようにしたい。	・ 生徒に must と have to の違いを理解させるために、絵と簡単な英文を用いて説明する。視覚と文章を組み合わせることで、生徒は「must は話している人の強い気持ちや命令」「have to はルールや状況による義務」という違いを分かりやすく理解できるようにする。 ・ 絵と英文を組み合わせることで動名詞を理解させる。例えば「禁煙マーク」には No smoking.、「教室で飲食禁止」には Eating and drinking in class is not allowed. を示す。また Learning world rules and laws is very exciting. を提示し、動名詞が「～すること」を表し、禁止や主語など様々な場面で使えることを直感的に理解させる。さらに must not との違いも示し、禁止表現の幅を広げる。こうした学習を通して、生徒が自分たちの調べたルールを多様な表現で英語に直し、プレゼンテーションに活用できるようにする。
活用する	発表の練習をしてみよう⑥ ○発表の練習をしてみよう。 ○今日の発表どうだったか振り返ろう。 グループでプレゼンテーションをしてみよう⑦ ○各グループでプレゼンテーションを行おう。 ○プレゼンテーションは、どうだったかな。	・ 聞き手には「よいところを1つは必ず書こう」と伝えることで、互いに前向きな学びができるようにする。 ・ 発表しているときに動画をとることで、次の授業で振り返りやすくするようにする。
深める	Let's improve our presentations!!⑧ ○前回のプレゼンテーションを振り返ろう。 ・ 暗記ができていなかった。 ・ ジェスチャーは頑張れた気がする。 ○もう一度、ペアで練習をしてみよう。 ・ 前回より、アイコンタクトができていたよ。 ・ ジェスチャーがあってわかりやすかった。 ・ 前より声を大きくできた。 ○違うグループで発表してみよう。 ・ 前回の反省を直せるようにしたいな。 ○他グループの良かった点を共有しよう。 ・ ジェスチャーがあって見ててわかりやすかった。 ・ アイコンタクトがしっかりできていた。	・ 自分の発表を具体的に思い出すために、前時に撮った動画を視聴し、良かった点・改善できる点を見つけられるようにすることで、発表を振り返ることができるようにする。 ・ 改善点を具体化させるために、ペアで練習し、その場で確認することで、生徒が自分の姿を客観的に振り返り、改善点を具体的に試せるようにする。 ・ 改善できていることを自信につなげるために、ペア練習で改善した点を前時とは異なるグループで発表させることで、生徒が新しい聞き手にも伝わることを確かめ、改善の効果を実感できるようにする。 ・ 他グループで行った発表の良かった点を聞きあうことで、工夫や表現に触れ、自分の表現をさらに高められるようにする。
活用する	みんなに伝えて、みんなで学ぼう⑨⑩ ○みんなの発表を聞こう。	・ 発表の工夫に気づくために、聞き手が発表者へのコメントを具体的な言葉で書くように指示することで、よかった点と改善点を明確にし、次の授業での学びや発表の改善に生かせるようにする。 ・ 多様な意見に触れるために、複数人からのフィードバックを集めることで、自分では気づけなかった視点を得られるようにする。
深める	Up grade your presentation!⑪ ○前時に撮影した発表動画を視聴し、自己評価シートに記入をする。 ○全体で、改善点を共有する。 ○全体で、確認したチェックポイントを意識して個人練習を行う。 ○ペアで再発表し、フィードバックを行う。	・ 発表のよかったところ、改善点を見つけるために、動画を見ながらフィードバックシートに書かせることで、改善点に気づけるようにする。 ・ 一人一人の気づきを広げるために、自分で書いた「よかったこと」と「直したいこと」を共有することで、ほかの人の考えを参考にできるようにする。
活用する	マイケル先生に伝えてみよう!⑫ ○マイケル先生と1対1で1分間以内に発表を行う。 ・ 練習で気を付けたことができるようになった。 ・ アイコンタクトを意識することができた。 ・ 緊張しちゃって、グループ発表のときより声が小さくなっちゃった。	・ 発表が終わった生徒には、自分の発表を振り返らせるために、その場で「できたこと」と「反省」をシートに書かせることで、生徒が改善点を自分の言葉で確認できるようにする。 ・ まだ発表をしていない生徒には、本番に備えさせるために、自分の順番を待ちながらプレゼンテーションの練習を続けさせることで、生徒が落ち着いて準備し、自信をもって発表に臨めるようにする。

(4) 検証の方法

本研究では、生徒 A の変容をもとに仮説を検証する。生徒 A は授業に前向きに取り組む一方、英語への苦手意識が強く、発音や語順に自信がないため、発表では原稿に頼り、聞き手を見たりジェスチャーを用いたりすることが難しい様子が見られた。

そこで本単元では、ペアや小集団で安心して発表できる場を設けるとともに、発表を動画で振り返り、自身の視線や声量などを客観的に確認できるようにした。また、友達からの具体的な助言をもとに改善点を見直す機会を設けた。これらの活動を通して、発表への不安を軽減し、ALT へのプレゼンテーションでは、原稿に頼りすぎず、自分の言葉で相手に伝えようとする姿を期待した。

3 実践

(1) 手立て 1

「ペア → グループ → クラス → ALT」と相手の範囲を段階的に広げる発表活動

単元を通してペア・グループ・クラス・ALT という 4 段階の発表活動を設定した。また、各段階の発表後には Forms で生徒の達成感の記録を行い、変化を可視化することで、段階ごとの手ごたえを検証した。「どのように伝えと良いか」を自分で気づき、次の発表に生かしていく学びを重視した。段階的に挑戦のレベルを上げていくことで、生徒が「伝える」活動に慣れ、自信を積み重ねながら表現力を高めていくという構造を意図していたが、その効果が調査結果と生徒の振り返りの両面から確認できた。

ア ペア発表

単元の導入では、生徒が安心して発表に取り組めるよう、固定ペアでの発表活動を行った。ペアを固定することで、互いの変化や成長に気付きやすくなると考えた。

生徒 A は初回の振り返りで、「ペアの子がすごくすらすら話せていたので、真似して参考にしてみようと思いました」と記述していた。このことから、友達のよさを自分の発表に取り入れようとする姿が見られ、ペア活動が安心して挑戦できる場となるとともに、自身の発表を見直すきっかけになったことがうかがえた。

イ 4人グループ発表

次の段階として、4人グループでの発表を行った。聞き手が増えたことで、生徒は「相手にどう伝わるか」をより意識するようになった。

生徒 A は発表後、「みんなの発表を聞いて、ジェスチャーとかアイコンタクトがすごく良かったから自分もやれるようにしたいと思った」と振り返っていた。この記述から、発表内容だけでなく、「どう伝えるか」という表現の工夫にも目を向けるようになったことが分かる。また、友達の多様な発表から学ぶことで、自分の発表を見直す視点が広がっていく様子が見られた。

ウ 別グループへの発表

さらに、メンバーを入れ替えた別グループでも発表を行った。同じ内容を異なる相手に伝えることで、生徒は自分の発表を見直し、改善点をより具体的に意識する様子が見られた。

生徒 A は、「みんなアイコンタクトやジェスチャーがすごくできていたと思ったので、私も他の人みたいにできるようになりたいと思った」と振り返っていた。このことから、他の友達の発表を参考にしながら、自分の課題を具体的に捉え、取り入れたい表現を考える姿が見られた。聞き手や仲間が変わることで、新たな視点から自分の発表を見直す機会となったことがうかがえる。

エ クラス全体発表

クラス全体での発表では、聞き手が増えることで緊張感が高まる一方、友達の多様な発表から表現の工夫を学び、自分との違いに気付く機会となった。

生徒Aは振り返りで、「私とどこが違うんだろうとたくさん考えさせられました。足りないところはジェスチャー、テンポ感、スムーズに読めているかなので、本番までに改善したいです」と記述していた。このことから、友達の発表と比較しながら、自分の課題を具体的に捉えていたことが分かる。ペアやグループでの発表を積み重ねた経験により、「どこを改善すればよいか」を意識して発表を見たり、自身の発表を振り返ったりする姿が見られた。

(2) 手立て2

本実践では、自己評価、友達からのフィードバック、固定ペアでの短い対話など、いくつかの視点で聞き手からフィードバックを受け取る時間を設けた。フィードバックの方法は、口頭でのコメント、紙への記述、Forms を用いた方法など、活動の場面に合わせて複数の形を取り入れた。発表の規模がペア、グループ、クラスと広がる中で、聞き手から様々な視点でアドバイスをもらいそれを参考にした、振り返りの内容にも広がりが出ることを意図して構成した。

ペアは固定とし、発表後には必ず数分間の対話を行った。同じ相手と続けて振り返ることで、「前回よりどうだったか」「どの部分が変わってきたか」などの細かな点に気づきやすくなると考えたためである。実際に、生徒Aとペアの生徒との間では、次のようなやり取りが見られた。(資料2)

生徒A：「今日は、ジェスチャーがんばるからそこもみてね。」

ペア：「ジェスチャーもよかったけど笑顔もよかった。けど、スライドと合わせて話そうとすると止まるところがあるから、そこもやれるといいかも。」

生徒A：「そこを意識して次やってみる。」

(資料2) ペア活動のやりとり

固定ペアとの対話は、次の発表で何を改善すべきかを考えるきっかけとなり、互いの成長を伝え合える安心した学習環境につながった。また、グループ発表やクラス発表では、友達からのコメントをもとに、生徒Aは自分の課題や良かった点を整理し、「すらすら読めるように練習を何回もしようと思いました」と振り返っていた。このように、自己評価や友達からのコメント、固定ペアとの対話を継続して取り入れることで、生徒は自分の課題を具体的に把握し、次の発表に向けて主体的に改善しようとする姿が見られた。

(3) 手立て3

本実践では、すべての発表を動画で撮影し、自己評価シートを用いて振り返る活動を行った。生徒は自分の発表を客観的に見返すことで、良さや改善点に気付くことができた。自己評価シートは、「How you look」「How you sound」「How you speak」の3観点について5段階で評価し、さらに良かった点と改善点を文章で記述する形式とした。数値だけでなく言葉で振り返ることで、改善点を具体的な行動につなげることをねらいとした。

1回目のグループ発表後、生徒Aは「ジェスチャーができなかったからジェスチャーをする回数をふやす。すらすら読めるように練習する」と記述しており、動画を通して自身の課題を具体的に捉えていた。

その後の発表では、自己評価を前回より高くし、「前よりさいしょがゆっくりだけと言えるようになってきた。発音は結構ほめてもらったので課題は、アイコンタクト、大きい声、スムーズ、いろいろあるので頑張りたいです。笑顔でなるべく前を見てがんばります」と振り返っていた。

このことから、生徒 A は前回との違いを比較しながら、できるようになった点と今後の課題を具体的に捉えられるようになったことが分かる。また、自己評価を継続して行ったことで、自身の成長を実感し、次の発表への意欲につながったと考えられる。

4 成果

ペア → グループ → 別グループ → クラス → ALT と、聞き手の範囲を少しずつ広げながら発表を繰り返したことで、生徒たちの自信が着実に高まっていったことは、クラス全体で行った Forms の達成感調査から明確に確認できた。(資料 3)



自己評価や友達からのフィードバックを通して、生徒は「できたこと」と「改善点」を整理しながら発表を改善することができた。また、発表を重ねる中で、声の大きさや視線、ジェスチャーなどの発表技能への意識も高まった。さらに、ペアからグループ、クラスへと段階的に発表の場を広げたことで、成功体験を積み重ね、自信や達成感の向上につながったと考えられる。

さらに、最終的な成果は、7月に実施したパフォーマンステストと今回のパフォーマンステストの得点比較にも表れていた。前回 19 点 だった生徒 A は、今回 35 点 を獲得し、大幅な点数向上を見せた。以前は、暗記した英文を言おうとして途中でつかえ、原稿に戻ってしまう場面が多かったが、今回は動画での振り返りや友達の発表から学んだ点を生かし、アイコンタクト・声の大きさ・読むテンポなど、基本的な表現スキルに安定感が見られた。段階的な発表経験を積んだことで「伝える」という意識が高まり、ただ読む発表から「相手に届ける発表」へと変化していた。以上の結果から、「発表の場を少しずつ広げながら、自信と表現力を高めていく」というねらいは、クラス全体の傾向としても、生徒 A の個別の変容としても達成されていたと言える。生徒が発表を恐れるのではなく、「次はもっと良くしたい」と主体的に改善へ向かう姿が見られたことは、本単元における大きな成果であった。

5 反省

本実践では、「聞き手に伝わる発表」を目指して段階的な発表活動と振り返りを取り入れた。その結果、生徒は発表に前向きに取り組み、自信や達成感を高める姿が見られた。一方で、発表技能を重視したため、must・have to・動名詞などの文法の意味や使い方を深く考える時間が十分に確保できず、発表技能と文法の正確さをバランスよく指導する必要性が明らかになった。

また、ALT を導入で活用したものの、単元途中でフィードバックを受ける機会を設けられなかったことや、単元後半はパフォーマンステストを意識するあまり、話し方の改善に重点が置かれ、「何を、なぜ伝えるのか」という内容面の深まりが十分ではなかったことも課題である。今後は、ALT から助言を受ける機会を取り入れるとともに、伝える内容と伝え方の両方を考える時間を確保し、内容と表現をバランスよく育成できる発表活動を目指したい。